

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月18日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730493

研究課題名（和文） 幼稚園から小学校への協同性の発達と教師の援助
—縦断的観察による活動ごとの発話分析—

研究課題名（英文） Teachers' actions encouraging children's cooperativity in transition from kindergarten to elementary school

研究代表者

岸野 麻衣 (KISHINO MAI)

福井大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：80452126

研究成果の概要（和文）：

幼稚園から小学校への移行において「協同性（共通の課題目的に対して試行錯誤しながら協力して実現しようとする）」の発達とそれに向けた教師の援助について、年長児クラスから小学校1年生までの横断的・縦断的観察を行った。幼稚園での自由遊び・集団活動と小学校でのグループ活動・一斉授業の活動タイプによる特徴を検討した結果、活動の構造は異なるが、幼稚園での経験が小学校での学習のベースになっていた。

研究成果の概要（英文）：

This study examined teachers' actions encouraging children's cooperativity in transition from kindergarten to elementary school. The fifth-age classroom in a kindergarten and the first-grade (six-age) classroom in an elementary school were observed longitudinally. The relations between the activities in kindergarten and the classes in elementary school were analyzed. Although the structures of the activities differ from each other, children learned in elementary school, based on their experiences in kindergarten.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1600000	480000	2080000
2009年度	0	0	0
2010年度	700000	210000	910000
2011年度	700000	210000	910000
年度			
総計	3000000	900000	3900000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼児教育・遊び・授業・協同性・幼小の移行

1. 研究開始当初の背景

近年、幼児教育と小学校教育の連携（以下、幼小連携）の必要性が強く叫ばれている。これまでの研究では幼小の移行による変化は2つの軸で捉えられてきたといえる。第1の

軸は活動枠組みの変化であり「自由遊びから教室での授業へ」という変化である。幼稚園では遊び中心の生活が主であるのが、小学校に入ると教室での授業が中心となりそこには様々なルールも伴う。そのため就学後の環

境に適応できず、騒いだり歩き回ったりして静かに座っていることができない「小1プログラム」への対応策が検討されている(新保, 2001)。第2の軸は学習内容の変化であり「体験による理解から様々な記号の理解へ」という変化である。幼稚園では数や言葉が体験の中で理解されているのが、小学校では「算数」「国語」として計算や文字といった記号の習得を目指す。小学校の教科での学習事項が幼稚園の遊びの中に表われる様子も示されている(佐々木, 2004)。

こうした変化に対応すべく、幼小での交流活動など変化を緩やかにする工夫が試みられている。しかし具体的な活動の工夫だけでなく、授業の成立という活動枠組みと教科学習という活動内容の両方の前提となる「学び方」の連続性を考える必要がある。その重要なものとして、「協同性」が挙げられる。協同性とは、環境との出会いや人間関係の深まりに沿って子ども同士で共通の目的を生み出し、試行錯誤しながら協力して実現していくことである。小学校の授業は、班や学級単位で一つの課題に向かって協力して解決策を考えていく協同的な学びであるといえ、その原型は幼児期において他者とモノやイメージを共有して協力して遊びを展開していく協同的な遊びにあるといえる。協同性を核に幼小の接続を試みている実践事例は報告されているが(例えば新宿区立第三幼稚園・小学校, 2005)、活動の中での子どもや教師の発話や行為の具体的なデータ分析は不十分である。幼稚園には自由遊びの他にも話し合い等の集団活動が行われており、また小学校でも一斉授業だけでなく班などのグループ活動も行われている。活動によって協同性の質は異なると思われ、また活動間のつながりによって協同的な学びが展開することも予想される。

そこで本研究では、幼小の移行時において活動ごとの「協同性」の特徴や発達の過程、教師の援助について、子どもや教師の具体的な発話や行為の分析により検討する。

2. 研究の目的

本研究では、幼稚園から小学校への移行時において、授業の成立や教科の学習の前提となる「協同性(共通の課題目的に対して試行錯誤しながら協力して実現しようとする)」の発達とそれに向けた教師の援助について、幼稚園年長児クラスから小学校1年生までの横断的・縦断的観察により、幼稚園での自由遊び・集団活動と小学校でのグループ活動・一斉授業等の具体的な活動タイプによる特徴を検討する。また観察したクラスを担当していた幼稚園の保育者と小学校の教師への聞き取り調査により、実践者の視点も取り入れて多角的に分析すると共に、幼小の移

行を共有し連携することによる専門性の向上過程も検討する。

3. 研究の方法

(1) 幼稚園の年長児クラスにおける協同性の発達と教師の援助

1つの幼稚園の年長児クラスを対象に、隔年で2年にわたり、デジタルビデオカメラを用いて15日分登園から降園まで観察・記録を行い、自由遊びと集団活動の場面について相互作用のデータを収集した。データはコンピュータで加工して整理し、文字に起こし、一次資料とした。エピソードごとに区切って分類し、幼児期の協同性の発達と教師の援助を活動の特徴ごとに事例を質的に分析すると共に、小学校1年生の活動と比較検討を行った。なおビデオ映像や文字記録は担当の保育者にフィードバックして実践の振り返りに活用すると共に観察データの解釈に生かした。

(2) 小学校1年生における協同性の発達と教師の援助

幼稚園に隣接する1つの小学校において、前年度年長児クラスで観察していた子どもが在籍する1年生の学級を対象に、年間で4回観察を行った。その後の発達も視野に入れて考察するため2～5年生についても6回観察を行った。対象小学校のデータはビデオカメラにより記録し、コンピュータで加工して整理し、文字に起こし、一次資料とした。授業の場面ごとに区切って分類し、小学校での協同性の発達と教師の援助について、活動の特徴ごとに事例を質的に分析した。なおビデオ映像や文字記録は担当の教師にフィードバックして実践の振り返りに活用すると共に観察データの解釈に生かした。

4. 研究成果

(1) 幼稚園の年長児クラスにおける協同性の発達と教師の援助

① 自由遊びの中での協同性の育成

自由遊びの場面については23のエピソードを取り出すことができ、遊びの性質ごとに分類して、協同に向かう子どもの表現や共有の仕方の特徴を検討した。その結果、3つの特徴が見られた。

第1に、物を媒介に声を交わして行為が定まっていっていった。たとえば1つの事例では、蝶という生物によって3人の子どもがつながり、各自の知識や歌声が重なる中で蝶を追いかけるといって行為が続いていった。最後には1人の提案で草花を持って蝶を待つという行為に落ち着いた。他の事例でも、ごっこ遊びで1人が提出したイメージを基に他の子どもたちが取り入れていき、遊びが展開していくことも見られた。

第2に、共通の役割のもとで生じる人や物とのやりとりから行為が発生した。たとえばお店ごっこの事例では、お店ごっこのチケット係という共通の役割のもとで、3人の子どもが係としての振る舞いそのものを楽しんだり、お客さんへの応答やその場の物を媒介にやり取りしたりして、共同の行為が発生していた。

第3に、1人の意図を教師がつないで行為が決定されていた。たとえば10人前後の子どもが2組に分かれてコーンを回るリレーをした事例では、1人の子どものずい振る舞いに他の子どもが異議を唱えることで遊びが中断し、遊びの方向性の修正が迫られた。そこに教師が間に入ることで、子どもの意図を明確化し、可視化していき、他の子どもたちと共有し、ルールが定まっていた。

このように、目の前の対象に関わる面白さを通して、子どもが互いに知識・知恵・身体・声を交わして遊びが展開する過程や、一つの目標に向けて、その手立てについて子どもが意見を出し合っていく過程、目標に向けて問題が出現する中で、教師の援助により、問題の明確化や解決策の可視化、共有化が行われていく過程や、子どもがそれぞれに小さな役割を背負い、補い合いつつ様々な方法を模索していく過程が明らかになった。幼稚園段階においては、まずは小集団の中でこのような体験を積み重ねていく必要があることが明らかになった。教師が子どもの遊びを援助していくにあたって、複数の子どもたちで共通の行為を意思決定していくには、子どもたちをつなぐ物や役割が鍵となっており、複雑なルールを含む遊びでは教師が意思の明確化などを果たすことが求められることが示唆された。

②集団活動の中での協同性の育成

教師が自由遊びと集団活動をつなぎ、子どもたちの時間と空間と関係をつなぐことで協同性を育成していく過程を明らかにした。特に一斉活動の前半に行われている、自由遊びの報告や相談等の話し合い場面の分析を行った結果、次の点が明らかになった。

遊びの紹介場面においては、たとえばペットボトルに紙やペンで装飾して制作した魚・クラゲ・イカなどの海の生き物や船、ティッシュペーパーの空箱に円形の車輪をストローと爪楊枝を用いて車輪が回って動く車など、制作の工夫が見られた際、制作した子どもたちに保育者が働きかけて遊びを紹介していた。その際、第1に、制作した物を子どもや保育者が持って見せ、クラスの子どもたち全体で具体的な物を提示して共有していた。それにより、製作者の子どもは自分のしたことを客観視することにつながり、また見ている子どもは自分の体験していない

事柄に出会う機会になっていたといえる。第2に、その上で、保育者が子どもに作り方や工夫点を説明させ、実際に遊んで示し、こうした一連の体験をみんなで共有していた。それにより、製作者の子どもは具体的な仕組みをことばにして語り伝える経験をする事になり、見ている子どもにとっては製作者に追体験することにつながっていたといえる。第3に、保育者は子どもたちが次にどのような工夫が可能か、考えられるようつなげていた。

問題解決場面においては、たとえばドッジボールにおいて人数がなかなか集まらないという問題や、つなひきで勝敗が決まった後も綱を引いて危険があるといったように、集団で遊ぶための工夫やルールが必要な場合に、保育者が子どもたちから遊んでいたときの問題を引き出してクラス全体に投げかけていた。その際、第1に、集まった人数や時間、ボールの所在といった具体的な物や図示を手がかりに話を進めたり、時には実際にその場でつなひきをやってみたりして、子どもたちが普通に過ごしていた出来事を問題として切り取って示すということになっていたといえる。第2に、保育者は子どもたちにどうしたらよいかを尋ねて考えさせており、子どもにとっては想像を働かせてより良い状況を考え、それに向けた方策を考える場になっていた。第3に、保育者は次回その遊びをするときにやってみる工夫を明確にして確認してつなげていた。

遊びの共有場面においても問題解決場面においても、第1に一つの物や事柄を具体的な物や体験を媒介に課題や問題を共有し、第2にクラス全体で同じ体験（擬似的な追体験や未来のより良い状況の体験を含めて）を持ってみんなのものにし、第3に次回の遊び場面につながる形で話し合いを終えるという構造になっていた。このように日々の保育の中で、遊びの課題や問題を共有しながら次の遊びに向けてみんなで考えていくということが重ねられることで、少人数での自由遊びでの経験が拡張され、協同性が形成されていくことが示唆された。

③幼稚園年長クラスの活動と小学校1年生の授業の比較

幼稚園の年長児クラスの活動と小学校1年生の授業の特徴を比較した結果、次の点が明らかになった。

幼稚園や保育所では、集団でのさまざまな活動もあるとはいえ、遊び中心の生活を送っているのが、小学校に入学すると、子どもはいろいろな面で大きな変化を経験することになる。遊び中心の生活から学校生活へという変化である。

そこではまず、幼稚園と小学校では時間や

空間の区切られ方が異なることが挙げられる。さらに求められる振る舞い方も異なる。教室で話をするときも、教師に向かって一対一で話すのではなく、大きな声で学級のみんなに向かって話すことが求められるようになっていく。また思ったことをいつでも口にすることではなく、手を挙げて発言することも求められるようになっていく。こうしていくうちに、時間や空間を越えた相手に対して出来事や思いを伝えることができるようになっていく。また教室では自分ひとりではなくみんなで学んでいくのだということを意識していくようになっていく。幼稚園や保育所においても、みんなに向かって話すことや手を挙げて話すことはあるが、小学校ではそれがより自覚化され、ルーティンとなり身体化されていくといえる。

同時に、学習面での育ちとして、体験による学びから脱文脈化した学びへという変化がある。幼児期には遊びの中で文字や数に触れ、身体でその感覚をつかんでいき、それが重要であるのが、小学校に入ると少しずつ文字や数を生活に即した形で学び、操作できるようになっていく。

さらに人間関係の側面でも、幼稚園から小学校にかけて大きく変化していき、遊び仲間から協同関係へという変化がある。幼児期には、少人数の仲間同士やクラス集団で一緒に遊ぶ中で、基本的な社会的ルールを学んでいく。一つの目標に向けてみんなで試行錯誤しながら取り組んでいく中で育まれていく協同性は、小学校では活動の前提となっていく。一方小学校では幼稚園や保育園に比べて活動の時間や空間に制約があり、目標も明確になっており、その中で子どももいっそう協同性を身につけていく。グループで決断を下す際に、他者を思いやり、お互いを尊重できるようになり、またこのように提案してリーダーシップを発揮する子どもも出てくる。一斉授業においても同様に、お互いのことばを尊重して聞き合うことが、学習内容の深まりにも、学級の人間関係にも結びついていき、子どもたちは集団で協同する力を身につけていく。

(2) 幼稚園年長クラスから小学校1年生への移行における協同性の発達と教師の援助

前年度の幼児が小学校でどのように協同性を高めていくのか、フィールドワークにより検討を行った結果、次の3つが明らかになった。

第1に、班活動においては、幼稚園の自由遊びと異なり、メンバーを選択できず、内容も考えや製作物の交流やゲームなど決められており一定の制約があった。幼稚園においては自由遊びを集団活動につないでいくのに対して、小学校では一斉での学習活動を構

成するものとして班活動が位置づけられていた。しかし子どもの経験としては、幼稚園での自由遊びにおいて物や役割を介して少人数でやりとりをしてきた経験がベースになっており、「私的」に発話しあうことが学習の展開につながっていた。机間指導を通して教師が班員の意思をつなぐこともあるが、子どもたちだけで交渉しあう余地も大きくなるのがうかがえた。

第2に、一斉授業の場面では、個々の子どもの発話をつなぐという点で、幼稚園と小学校とに共通する構造が見られた。子どもの経験としてもみんなに向けて話すよう指向されるという点で共通していたが、小学校では「話す」のみならずむしろ「聴く」ことが大事にされ、他者の話を聴いて自覚的に自分の学習活動につなぐレベルに向かっていった。

第3に、協同性の発達を支える教師の専門性の向上として、幼稚園教諭と小学校教諭が互いの実践を知ることは幼児期から児童期への子どもの発達やそれに相応しい活動の目標・ねらいを意識することにつながっており、活動の設定の工夫につながっていた。またそれぞれに長期的な実践を記録として書き記して省察することが子どもの育ちや自身のあり方を見直し転換を図るという意味で専門性の向上に結びついていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

- ① 岸野麻衣 小学校の通常学級における協同関係による支援の可能性 日本発達心理学会第23回大会(名古屋国際会議場) (ラウンドテーブル「学校における多様なレベルの支援の意味と可能性—個、集団、そこからの移行をめぐる—」) 2012年3月9日
- ② 岸野麻衣・松木健一・木村優 長期にわたる実践を書くことによる教師の専門性の発達(1) 教師としてのアイデンティティの再構成 日本教育心理学会第53回大会(北海道学校心理士会・北翔大学) 2011年7月26日
- ③ 岸野麻衣 幼稚園における協同的な活動に向けた遊びの共有と相談—クラス単位での話し合い場面の分析 日本発達心理学会第22回大会(東京学芸大学) 2011年3月26日
- ④ 岸野麻衣 小学校における授業研究による教師の力量形成: 教職大学院と連携した校内研究の組織化を通して 日本教育心理学会第52回大会(早稲田大学) 2010年8月29日
- ⑤ 岸野麻衣 幼児の遊びにおける小集団で

の意思決定プロセス 日本発達心理学会
第 20 回大会 (日本女子大学) 2009 年
3 月 23 日

[図書] (計 1 件)

- ① 岸野麻衣 2010 第 10 章学級での育ち
無藤隆・中坪史典・西山修編著 新ブリ
マーズ発達心理学 ミネルヴァ書房 p
110-120

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸野 麻衣 (KISHINO MAI)
福井大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 80450493